

感染症定期報告感染症別文献一覧表(医療機器2025/4/1～2025/9/30)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	E型肝炎	IDWR. 26:50(2024)2-2	2024年12月18日集計分。4類感染症：E型肝炎9例。感染地域(感染源)：東京都2例(豚肉1例、牛肉1例)、群馬県1例(鹿肉)、静岡県1例(不明)、宮崎県1例(イノシシの心臓の生食)、国内(都道府県不明)2例(不明2例)、国内・国外不明2例(不明2例)。
2	E型肝炎	IDWR. 27:11(2025)2-4	2025年3月19日集計分。4類感染症：E型肝炎15例。感染地域(感染源)：茨城県3例(豚肉1例、牛肉1例、不明1例)、北海道1例(ジンギスカン/ホルモン)、宮城県1例(不明)、東京都1例(豚レバー)、神奈川県1例(不明)、三重県1例(豚肉)、大阪府1例(不明)、国内(都道府県不明)4例(不明4例)、タイ1例(不明)、ベトナム1例(不明)。2024年第11週から2025年第10週までに診断されたものの報告遅れとして、E型肝炎1例。感染地域：愛知県 感染源：生焼け豚レバー。
3	E型肝炎	Hepatology. 81(2025)1343-1352	本文献は、ニューカレドニア島におけるE型肝炎ウイルス(HEV)のアウトブレイクについて、疫学的・ウイルス学的調査結果を詳細に述べたものである。2023年8月から12月にかけて127例の症例が報告され、症候性患者のうち、22.8%にあたる29人が入院を必要とし、3人が死亡した(症例致死率2.3%)。入院した患者は、肝疾患や心血管疾患等の既往症をより頻繁に有していた。特に肝疾患の既往がある患者は全員入院が必要であった。このアウトブレイクは、HEV遺伝子型3型によって引き起こされ、特に症例の大部分を占めるウイルス株は、潜在的に新しいサブタイプであることが示唆された。感染源の調査では、患者の71.5%が豚肉製品の摂取をリスク要因として報告したが、島内で検査された食品や養豚場からは、流行株に一致するウイルスは検出されなかった。遺伝子解析の結果、ニューカレドニアの流行株は、オーストラリアのHEV株と高い相同性を示しており、2023年のオーストラリアからの豚肉輸入が感染源である可能性が示唆された。ただし、輸入された乾燥ハムの検査は陰性であった。血清有病率の調査からは、このアウトブレイクにおける不顕性感染者の数が多かったと推定された(推定5000例超)。今回のニューカレドニアでの流行は、工業国ではまれな大規模なHEV-3アウトブレイクであり、通常は軽症とされるHEV-3感染でも、相当数の症例で入院や死亡に至る重症化が起こりうることを示した。
4	E型肝炎	Infection. 53(2025)523-534	本研究は、2015年から2023年にかけてイタリア中部のアブルッツォ州及びラツィオ州で発生したヒトの国内感染HEV株の分子特性評価を目的としたものである。118例の感染者サンプルを解析した結果、主要なHEV遺伝子型は3であり、その中でも3fが最も多く(51.7%)、次に3e(25.4%)、3c(21.2%)が続いた。3fは冬から早春に集中し、3eは夏に多く見られる季節性が認められた。分子クラスター解析により、未認識のポイントソースアウトブレイクや、同一又は類似ウイルス株の長期伝播が示唆された。垂型の分布パターンは、イノシシよりブタの分布とより一致し、ブタ及びその派生食品が主な感染源である可能性が示唆された。分子特性評価は、アウトブレイクの認識とHEV循環の監視に不可欠である。

ID	感染症(PT)	出典	概要
5	E型肝炎	J Med Virol. 96(2024)e70024	<p>本研究では、急性肝炎(AH)の重要な原因ウイルスであるHEVについて、2つのグループ(グループ1-急性A型肝炎患者(n=44)、グループ2-非A-C型AH患者(n=47))に分けて評価した。グループ1の抗HEV IgM及びIgGの陽性率はそれぞれ4%(2/44)、14.5%(7/44)であった。ウイルスRNAはどの検体からも検出されなかった。グループ2の抗HEV IgM及びIgGの陽性率はそれぞれ4.3%(2/47)、14.9%(7/47)であった。抗HEV IgM/IgG陽性であった2例のうち1例ではRNAが検出され、遺伝子型はHEV-3fであった。これらの結果は、非A-C型AHの症例ではHEV感染を診断の可能性として考慮すべきことを示している。急性E型肝炎と同定された患者は、ブタの間でHEV血清有病率が高いという報告があるブラジル北東部に最近旅行していた。本研究で特徴付けられた塩基配列と、患者が出かけた近隣都市のブタから分離された株との間に系統学的に密接な関係が認められたことから、この地域での人獣共通感染症の可能性が示唆された。本研究より、全国的なHEV感染をよりよく理解し管理するために、研究を拡大しサーベイランスを改善することの重要性が示された。</p>
6	E型肝炎	J Med Virol. 97(2025)e70414	<p>本研究は、ポルトガル北部及びスペイン北部(nPS)の廃水、及び肥育されているブタの糞便サンプルにおけるHEVとラット肝炎ウイルス(RHEV)の環境サーベイランスを行い、HEVとRHEVの循環状況を調査したものである。HEVはブタを主要な宿主とする人獣共通感染症ウイルスであり、RHEVは人間での症例が報告されている潜在的な人獣共通感染症病原体である。2020年4月から2022年1月にかけて、合計44の廃水サンプルと400の肥育されているブタの糞便サンプルが収集、分析された。廃水サンプルではRHEV陽性が高く(49サンプル、88.64%)、HEV陽性はわずか(3サンプル、6.82%)であり、この地域ではRHEVが優勢で、HEVはほぼ存在しないことが明らかになった。400全ての肥育されているブタの糞便サンプルからは、HEVもRHEVも検出されなかった。ブタサンプルでウイルスが検出されなかったことにより、この地域の豚産業において現在へペウイルスの循環が限られているか、あるいは存在しない可能性が示唆された。肥育されているブタにおけるHEV及びRHEVの非検出と、廃水におけるRHEVの高検出率は、廃水システムにおける人獣共通感染症ウイルスの監視を継続する必要があることを示唆している。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
7	E型肝炎	ProMED-mail 20240928.8719050	<p>新しい研究によると、ブタは最近ヒトに感染することが確認されたラットに一般的なHEVの株の伝播媒体として機能する可能性があることが報告された。Rocahepevirus rattii 株は「ラットHEV」と呼ばれ、ラットがウイルスの主要な保有者であることを示している。2018年に香港で免疫抑制状態のヒトに初めて報告された人間の症例以来、少なくとも20件の人間の症例が報告されている。これには正常な免疫機能を持つ人も含まれている。ラットHEVに感染したヒトはラットへの接触は報告されておらず、感染の原因は不明である。他の人間のHEV感染の疑われる原因は、多くの場合、生の豚肉を摂取しており、ラットHEVの潜在的な経路となる可能性が考えられている。オハイオ州立大学の研究者は、人間から分離されたラットHEV株がブタに感染し、農場のような条件で共住する動物間で伝播されることを発見した。ラットは豚舎の一般的な害虫であり、豚肉生産業界がラットHEVが人間に伝播する可能性のある環境であることを示唆している。「我々は常にどのウイルスが今後出現する可能性があるか把握すべく、ラットHEVが米国で拡大する可能性がある場合に備え、このウイルスの遺伝子を知る必要がある。」と、オハイオ州立大学の食品動物健康センターに基づく獣医予防医学の准教授であるスコット・ケニー氏は述べている。関連する研究は最近関連文献で発表された。E型肝炎は世界中で人間の急性ウイルス性肝感染症の主要な原因であり、主に衛生状態が悪い発展途上地域で発生する。このウイルスは米国のブタにも常在しているが、主に肝臓に存在し肉が調理されると死滅する。過去の研究では、ラットHEVの種間感染性をテストした結果、実験に使用された株は非ヒト霊長類への感染はなかった。「それは6-7年間は人間への感染は考えられていなかったため検出対象からも外れていた。しかし、現在はヒトへの感染が報告されているため、解明する必要がある。」とケニー氏は述べている。</p> <p>食品動物健康センターで当該研究を完了したクシュ・ヤダブ氏は、ウイルスのゲノム配列を使用してLCK-3110の感染性クローンを構築した。クローン化されたウイルスが複数の種類の人間及び哺乳動物の細胞培養及びブタで複製されることを確認した。研究者は次に、LCK-3110株又は米国のブタに存在する別のHEV株を含む感染性溶液を、また対照群として生理食塩水をそれぞれブタに注射した。1週間後、HEV株を受け取った両グループの血液及び糞便中にウイルス粒子が検出されたが、ラットHEVに感染したブタの方がレベルが検出率が高かった。2週間後、上述の接種を受けていない共住するブタも糞便中にラットHEVを排出し始めた。これは、ウイルスが糞口経路を通じて広がったことを示していた。感染したブタの組織、体液内でウイルス性RNAが陽性となったが、当該個体に疾病様の兆候は認めなかった。以前の調査において罹患したラットも臨床症状を呈していなかった所見と一致していた。この発見は、人間に感染するさまざまなHEV株が脳に害を及ぼす可能性があるという懸念の高まりと一致している。ラットHEVに関連する人間の死亡例の1つは、髄膜脳炎によって引き起こされていた。「HEVは神経障害に対する重要性が懸念されており、現在の多くの研究はHEVによって神経病理が引き起こされる方法に焦点を当てている。」とヤダブ氏は述べている。また更に「既知の人間の症例数は少ないものの、その多くは免疫抑制状態にあるため、米国内の移植臓器レシピエントが一般的なHEV及びラットHEVの感染リスクにさらされる可能性があることを示している。研究は現在、ブタの肝臓製品がラットHEVを含むかどうかに関心を持って、病気を防ぐため食品安全手順を探索していく方向である。」と見解を示している。</p>
8	E型肝炎	Risk analysis. (2025)1-16	<p>本研究は、ブタ由来の食品媒介性HEV感染リスクを評価するための定量的微生物リスク評価(QMRA)をモデル化し、レバーパテ、ひき肉、スライスされたレバーの3つの製品に焦点を当てて評価したものである。このモデルの特徴は、ウイルスが存在することを示すウイルスの遺伝物質(HEV RNA)と感染性HEVを分けて考慮している点である。フランスをケーススタディとしてモデルをパラメータ化して得られた結果、スライスされたレバーが最も高い感染リスクを示し、年間3447人の感染者数(無症候性感染も含む)が予測された。一方、ひき肉の感染確率は大幅に低く、年間21人の感染者数が予測され、レバーパテからは感染リスクはゼロと評価された。レバーパテでリスクがゼロなのは、小売前調理による感染性HEVの完全な不活性化が理由であり、これはHEV RNAの存在だけではリスクを適切に評価できないことを強調した。このQMRAは、感染性HEVをモデル化することの重要性を示し、将来的にサプライチェーンに沿った管理措置の影響評価に活用できることを示した。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
9	E型肝炎	Viruses. 16(2024)1869	本研究では、慢性肝疾患(CLD)を基礎疾患とする67歳男性患者における、HEV-3感染に関連した致死性肝炎の症例を報告する。患者はイノシシにおけるHEV-3有病率が高く、かつウイルスの遺伝的多様性が最近確認された地域に住んでいた。患者は野生のイノシシの狩猟を行っており、頻繁にイノシシ肉を消費していた。系統解析の結果、患者から分離されたHEVの遺伝子配列は、患者の居住地周辺で採取された複数のイノシシ由来のウイルス配列と非常に近縁であり、同一のクラスターを形成していた。以上より、HEVの感染源として、患者が消費したイノシシ肉が示唆された。本症例報告より、CLD及び重大な併存疾患を有する患者におけるHEV感染の発生が、臨床状態の悪化を招き、致死的な転帰につながる可能性があることが示された。感染予防が唯一の防御手段となると考えられる。
10	インフルエンザ	Euro Surveill. 30(19)(2025)2400662	オランダにおける2020年から2023年にかけてのヒトにおけるユーラシア型鳥インフルエンザ様ブタインフルエンザAウイルス(swIAV)の検出方法とウイルスの特性を評価した。オランダの国立インフルエンザセンターが調整する定常的な呼吸器サーベイランスシステム(一般開業医のセンチネルサーベイランス、地域住民参加型サーベイランス、診断検査機関からのウイルス特性評価)を通じて、ヒトからのインフルエンザAウイルス陽性検体が収集・分析された。この定常的なサーベイランス活動の中で、ユーラシア型鳥インフルエンザ様swIAVIに感染した3症例が偶発的に検出された。いずれも軽度な呼吸器症状を呈し、患者全員が完全に回復した。1例は、ブタとの密接な接触があり、農場のブタから検出されたswIAVと患者から検出されたウイルスが遺伝的に極めて類似していることが確認された。他2例については、ブタとの直接的な接触は確認されなかった。研究より、人獣共通感染症の可能性のあるswIAVウイルスがオランダで風土病であることが示され、ヒトにおけるswIAV感染症が現在把握されているよりも頻繁に発生しており、見過ごされている可能性が示唆された。
11	インフルエンザ	ProMED-mail 20250223.8722345	Seoul特別市及びその他によると、1月20日から2月12日までカンボジアを訪問していたA氏は2月14日午後から咳をし始めた。氏はカンボジアのビュフェで鶏肉及び豚肉を喫食していたが、鳥インフルエンザの感染が確認されたヒトとの接触はなかったことが明らかになっている。詳細な検査の結果、氏はA型インフルエンザウイルスの一種であるブタインフルエンザ(H1 2009)であったことが示された。なお、2024年4月には米国の酪農場で鳥インフルエンザの最初のヒト症例が報告されており、Texas州で1頭のウシがウイルスに感染し、そのウシの搾乳中に作業員1例が感染した。
12	インフルエンザ	Viruses. 16(2024)1921	本研究は、特に繁殖農場と育成農場におけるヒトとブタの接点におけるA型インフルエンザウイルス(IAV)の検出と遺伝的多様性を経時的に評価したものである。米国中西部の5つの養豚場で、従業員、繁殖農場の離乳前の子ブタ、及び下流の育成農場における同じコホートの子ブタを対象に、毎月アクティブサーベイランスを実施した。さらに、従業員と農場の情報を収集し、生産管理方法、IAVワクチン接種状況、診断手順、バイオセキュリティを評価した。研究より、離乳前の子ブタと比較して育成されたブタにおいてIAV RNA検出の陽性率が高いことが示され、育成段階でより多くの全ゲノム配列が得られた。農場従業員のサーベイランスにより、2022～2023年のヒトIAVシーズンを代表するH3N2が2回検出され、農場従業員の就業中のインフルエンザ罹患が確認されたため、ヒトとブタの接点におけるバイオセキュリティ対策の重要性が浮き彫りになった。農場従業員とブタの両方における農場レベルでのIAVの動態を理解するために、ルーチンなアクティブサーベイランスの重要性が示された。

ID	感染症(PT)	出典	概要
13	インフルエンザ	Viruses. 17(2025)185	<p>ブタはインフルエンザウイルスの混合容器として機能し、ヒトにおけるパンデミック株の出現を独自に促進する可能性がある。2021年から2023年の中国におけるブタのサーベイランスにおいて、11株のH1亜型ブタインフルエンザウイルス(SIV)が分離された。すべてのウイルスは、同一の起源を持つ内部遺伝子(PB2、PB1、PA、NP、M: pdm09/H1N1起源、NS: 北米トリプル・リアソータント起源)を有する遺伝子再集合体であった。H1N1分離株はすべて、中国で優勢なG4 EA H1N1ウイルスであった。2つのH1N2分離株は初期のヒトpdm09/H1N1 HA遺伝子を持っており、ブタからヒトへの感染経路の可能性を示唆していた。宿主域の特異性を決定する変異がすべての分離株で同定され、ヒトのレセプターに対する親和性を高める可能性があると考えられた。これらのH1亜型ウイルスは、事前に適応することなく <i>in vivo</i> でも <i>in vitro</i> でも効果的に複製し、異なる病原性と増殖特性を示した。一部のH1ウイルスはマウスに致死的な感染を引き起こすことも判明した。研究の結果から、中国で流行しているH1亜型SIVはヒトの健康を脅かす可能性があり、その進化と拡散を注意深く監視し続けることの重要性が強調された。</p>
14	インフルエンザ	Zoonoses and Public Health. 72(2025)42-54	<p>バックヤード生産システム(BPS)とは、家庭や小規模農場で行われる動物の飼育や農作物の生産のシステムである。本研究の目的は、バックヤード農場におけるヒトと動物の接触を調査し、動物由来A型インフルエンザウイルス(IAV)への曝露リスクを評価することである。2021年から2022年にかけて、チリの合計101のBPS農家とその家族(計180名)を対象に聞き取り調査を行ってデータを収集し、動物由来IAVへの曝露リスクを推定した。さらに、RT-qPCR及び血清学的検査を用いて、バックヤード動物におけるIAVの調査を実施した。IAV有病率は10.1%、血清有病率は43.5%であった。インタビュー対象者のうち、86%が定期的に家禽やブタとの接触活動に従事していた。手洗いは広く実施されているが、個人用保護具の使用は一般的ではなかった。高リスク要因には、年齢が高い、教育年数が少ない、農場外での仕事がない、バックヤード農場の生産額が大きい、バックヤード農場産物の家庭内消費が多いことが含まれた。本研究より、BPSにおけるIAVの循環、ヒトと動物の頻繁な接触が示され、バックヤード農家を対象とした、動物の管理やバイオセキュリティに関する啓発キャンペーンや教育プログラムが必要であり、特に貧困家庭や教育レベルが低い家庭に焦点を当てるべきであると考えられた。</p>
15	テニア症	Parasitol Int. 105(2025)102996	<p>本研究は、インドネシアの北スマトラ州シマルングン郡ラヤ・カヘアン地区における新しい <i>Taenia asiatica</i> (アジアイノシシ条虫)の固有地域の特定と、テニア症の有病率を分子生物学的に確認し、明らかにするものである。2023年9月の調査で、428人の参加者から糞便サンプルを収集したところ、テニア症の全体有病率は21.7%(93/428)であり、新たな <i>T. asiatica</i> の固有地域であることが判明した。遺伝的に低多様性で、サナダムシとの交雑に由来する可能性も示唆された。有病率は年齢18歳以上、男性、アブラヤシ農園従事者で高かった。感染は、生又は十分に加熱されていないイノシシや野生のイノシシの肝臓を習慣的に食べることと関連していた。予防のためには、衛生教育、食習慣の改善、サーベイランス、及び治療の実施が重要である。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
16	トキソプラズマ症	Preventive Veterinary Medicine. 238(2025)106446	本研究の目的は、デンマークにおける豚肉の消費によるヒトの <i>Toxoplasma gondii</i> 感染確率を推定するために、組織シストを基にした定量的リスク評価モデルを開発することであった。(ブタが感染すると、寄生虫は「組織シスト」という形で体の組織等に隠れる。)開発された「ファーム・トゥ・フォーク」モデルは、ブタの感染率から始まり、豚肉の部位における組織シスト数を推定し、調理・加工後の感染性の部位数を考慮に入れ、線量-反応モデルを用いて、感染部分の消費からヒトの感染確率を推定した。予測された有病率は、有機飼育されたブタと比較して、従来の方法で飼育されたブタに由来する部分の方が高かったが、これは、有機飼育された豚肉の方が部位あたりのリスクは高いが、従来の方法で飼育された豚肉の消費量がはるかに多いことに起因する。モデルでは、加熱が不十分な豚肉、乾燥塩漬けソーセージ、燻製製品が感染のリスクをもたらすと特定された。また、ヒトの感染確率は年齢や性別によって異なり、男性の方が豚肉消費量が多いために女性よりも高い予測有病率を示した。モデルの限界として、加工による部位の重量減少が考慮されていないことや、塩漬け効果に関する均一な仮定、用量-反応パラメータの不確実性、そして古い消費データを使用していることが挙げられる。本研究で示されたモデルは、組織シストを曝露単位としてヒトのトキソプラズマ症の確率を定量化するための概念的な枠組みを提供し、異なる国や様々な製品に適用できる可能性がある。
17	ブルセラ症	Emerg Infect Dis. 31(2025)795-798	本研究は、米国フロリダ州で野生のブタの肉と血液に接触したヒトの心臓植込み型医療機器から分離された疑いのあるブルセラ菌株の同定と特徴づけについて詳述したものである。株は <i>Brucella suis</i> であることが確認された。培養株の運動性試験も行われたが、運動性は観察されなかった。分離株は <i>B. suis</i> biovar 1 (生物型1) に最も近縁であり、特に米国の他の <i>B. suis</i> biovar 1 分離株 (ジェノタイプ49等) と遺伝的に近縁であることが示された。解析結果は、この症例が <i>B. suis</i> biovar 1 に感染していたことを明確に示した。
18	ブルセラ症	IDWR. 26:50(2024)3-3	2024年12月18日集計分。4類感染症:ブルセラ症1例。感染地域:インドネシア_感染源:乳製品。
19	ブルセラ症	ProMED-mail 20240917.8718817	定期的なブルセラ症監視検査により、パーク郡のウシ群でブルセラ症が確認された。検査はワイオミング州獣医研究所で行われ、アイオワ州エイムズの国立獣医サービス研究所で結果が確認された。感染が確認されたウシ群は隔離され、感染牛群は隔離解除の条件を満たすために連続検査を受ける。感染牛群の検査は、ウシ群の所有者、民間の獣医師、ワイオミング州畜産委員会職員、米国農務省、動植物検疫局、獣医サービス職員の協力によるものである。ワイオミング州の指定監視区域では、野生動物からウシへのブルセラ症の感染が時折発生するため、ブルセラ症陽性のウシの特定は珍しくはない。
20	レンサ球菌感染	Am J Trop Med Hyg. 111(2024)1243-1246	本研究は、韓国の済州島で発生したヒトにおける <i>Streptococcus suis</i> (<i>S. suis</i>) 感染の3症例の報告である。3例とも何らかの形でブタとの接触があり、1人は養豚場勤務、他の2人は同じレストランで生の豚肉スープを摂取していた。患者は敗血症、硬膜下膿胸、感染性脊椎炎と診断され、血液からは <i>S. suis</i> が分離された。分子生物学的解析にて、3症例全てが互いに近い遺伝的近傍性を示し、特に、症例2と3の菌株は遺伝的に非常に類似しており、共通の汚染源が示唆された。公衆衛生の観点から、 <i>S. suis</i> による重篤な感染症のリスクについて一般市民へ注意を促し、またブタ及びヒトの <i>S. suis</i> 感染症の監視の継続および規制の強化が重要であると考えられる。

ID	感染症(PT)	出典	概要
21	レンサ球菌感染	Am J Trop Med Hyg. 111(2024)1247-1251	本研究は、 <i>Streptococcus suis</i> 関連髄膜炎患者の疫学、臨床的特徴、及び転帰を評価した後ろ向き研究である。2016年1月から2020年1月の間にベトナムの熱帯病病院にて収集された153例(うち95例は2016~2017年の期間に発症)について分析した。年齢中央値は52歳(範囲、29~90歳)で、患者の70.6%は男性であった。患者52人(34%)は農民であり、メコンデルタが最も症例数の多い地域であった(60.1%)。感染症状で最も多かったのは発熱(151/153例、98.7%)で、次いで難聴(64/153例、41.8%)が多く、1例(0.7%)が死亡した。すべての分離株はセフトリアキソン、ペニシリン、バンコマイシン、レボフロキサシンに感受性を示したが、テトラサイクリンに対しては99.2%の分離株が耐性を示した。 <i>S. suis</i> 血清型2型が、南部ベトナムで最も関連性の高い病原体として確認された。主要なリスク因子として、ブタとの職業的接触、汚染された食品の摂取、皮膚の傷等が確認され、過去のデータと比較して、これらの疫学的因子に大きな変化は見られなかった。抗菌薬耐性の増加が懸念されるため、抗菌薬の使用は臨床的状況や患者の反応を考慮して慎重に行うべきである。
22	レンサ球菌感染	Jpn J Infect Dis. 76(2023)101-105	本研究の目的は、細菌性髄膜炎(BM)の病因と臨床的特徴を評価し、予防策のためのエビデンスを提供することである。2015年7月から2018年6月にベトナム北部の国立熱帯病院に入院した成人BM患者102人を対象とした後ろ向き研究を実施した。年齢18歳以上、臨床及び検査で感染の証拠がある患者を対象とし、HIV感染者は除外した。BM患者の80.4%が40歳以上の男性であり、ブタや豚製品との接触歴が30.4%、飲酒習慣が25.5%、基礎疾患が41.2%であった。臨床症状として、首の硬直(100%)、ケルニツヒ徴候(100%)、頭痛(80.4%)、発熱/低体温(74.5%)、意識障害(73.5%)が見られた。主な原因菌は <i>Streptococcus suis</i> (72.5%)で、次いで肺炎球菌(6.8%)、その他であった。 <i>S. suis</i> が成人のBMの主な原因であり、関連リスクとして、40歳以上の男性、飲酒習慣、重度の頭痛、発熱/低体温、2.0ng/mL以上のプロカルシトニンが考えられた。ベトナムは低所得の農業国であり、ブタや豚肉製品への接触リスクが高く、また飲酒習慣が多いことは注目に値する。これまでの報告によれば、 <i>S. suis</i> 感染は主に加熱不十分な豚肉製品の摂取と関連していたが、今回の調査では、このリスクはブタや生の豚肉製品との接触リスク(17.8%)よりも低かった(12.7%)。本疾患を予防するためには、ブタの飼育、衛生、食品安全に関する教育の強化が必要であると考えられた。
23	レンサ球菌感染	Microbes Infect. 27(2025)105273	本研究は、ブタとヒトの両方から分離された <i>Streptococcus suis</i> (<i>S. suis</i>) 5型菌株のゲノム情報を比較解析したものである。ゲノム解析の結果、ヒト患者及びブタから回収された8株の <i>S. suis</i> 5型菌株は、多くの病原性関連遺伝子及びマーカーを保有していた。5型菌株はほとんどがペニシリン等の複数の抗菌薬に対して感受性を示さないことが確認された。さらに、これらの菌株からは、複数の抗菌薬耐性遺伝子が検出された。ペニシリンに対して非感受性を示す菌株では、ペニシリン結合タンパク質の特定部位に遺伝子変異が見られた。5型菌株と2型菌株の比較ゲノム解析の結果、2型菌株にはない15の遺伝子が5型菌株にはあり、また5型菌株の間でもさらにいくつかの遺伝子の有無に違いがあった。本研究より、5型菌株のヒト及びブタにおける病原性の可能性と、2型菌株以外の血清型 <i>S. suis</i> におけるペニシリンに対する薬剤耐性モニタリングの強化の必要性が確認された。

ID	感染症(PT)	出典	概要
24	レンサ球菌感染	<p>Outbreak News Today. https://outbreaknewstoday.substack.com/p/thailand-reports-streptococcus-suis?utm_source=publication-search</p>	<p>タイ北部のPhrae県で、ブタレンサ球菌症の発生が報告され、14人が感染、2人が死亡した。当局は、ほとんどの症例が、ラーブム一等の生の豚肉料理の摂取に関連していると発表している。Somsak Thepsuthin公衆衛生相は、発生を食い止める為に省庁間の協力が継続中であることを確認し、感染拡大を抑えることができると国民を安心させた。ヒトのブタレンサ球菌症は、ブタに関連する人獣共通感染症である。この感染症は、特に特定の菌株が特定の毒素を産生する場合、致命的となる可能性がある。<i>Streptococcus suis</i> (ブタレンサ球菌)は、髄膜炎、聴覚障害、中毒性ショック、敗血症、心内膜炎等の症状を示すことがある。それは生の豚肉を摂取したり、傷口や粘膜に触れたりすることで感染する可能性がある。この病気を予防する為、一般市民は、常に個人衛生と環境衛生を実践するよう勧告されている。病気にかかったり死んだりしたブタや、その排泄物や体液との接触を避けるべきである。もしブタや生の豚肉に接触する必要がある場合は、次のことを行うべきである。保護手袋を使用すること。ブタや生の豚肉を扱った後は、手を洗うこと。すべての傷を洗浄し、適切に覆うこと。同省は、高熱や筋肉痛などの症状がある場合、特に生の豚肉を食べたり扱ったりしたことがある場合は、直ちに医師の診察を受け、飲食の危険性を医師に伝えるよう呼びかけている。</p>
25	レンサ球菌感染	<p>ProMED-mail 20250323.8723076</p>	<p>62歳の男性がレストランで売られていたブタの血液プリンを食べた後、春巻きと生野菜を食べた。2週間後、異常な症状が現れた。2025年3月21日、Quang Ninh省疾病管理センター(CDC)の担当者によると、検査の結果、患者はブタレンサ球菌による菌血症であることが確認された。現在のところ、家族や友人と一緒に食事をした人たちに症状は出ていない。しかし、ブタレンサ球菌は潜伏期間が長く、感染力が強い為、完全に安全とは言えないと医師は言う。医師らは抗生物質を使用し、集中治療を行い、患者は、現在も病院で経過観察中である。ブタレンサ球菌は、人獣共通感染症であり、ヒトからヒトへの感染を示す証拠はない。ほとんどの患者は、屠殺、生の血液プリンやその他の加熱不十分な食品を食べたことに関連している。血液プリンを食べたり、ブタを屠殺したりしなくても発病する例もある。原因は、感染した豚肉を生で食べるか、処理中の皮膚病変や引っかき傷を通して感染したブタに接触することである。重症化すると、病気は、敗血症性ショック、循環虚脱、低血圧、重篤な血液凝固障害、出血性壊死、塞栓症、多臓器不全、昏睡、死亡へと急速に進行する。さらに、家畜のブタ、野生のブタ、子ブタは「清潔」であり、血液プリンを食べることができると信じているヒトも多い。医学専門家は、どの品種のブタでもレンサ球菌感染のリスクがあることを確認している。これらの細菌は病気を引き起こすことなくブタの喉の部分に存在することが多く、「健康なブタのキャリア」と呼ばれている。ブタが感染した場合、細菌は血液や肉に存在することになり、十分に調理しなければ、ブタを食べたヒトはやはり感染のリスクが高い。これを防ぐには、豚肉を十分に調理すること、病気のブタや原因不明で死んだブタを屠殺しないこと、生の料理、特にブタの血のプリンを食べないことが必要である。生の豚肉を屠殺・加工する際には、保護具(手袋)を使用しなければならない。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
26	レンサ球菌感染	Veterinary Microbiology. 304(2025)110482	本研究は、タイにおいて、ヒト1名と臨床的に無症状のブタ17頭から分離された18株の <i>Streptococcus suis</i> 血清型31株のゲノム解析を行ったものである。血清型31株の遺伝的多様性として、合計で11の異なるSTが同定され、主要なSTはST2767であった。最小コアゲノム(MCG)分類により、血清型31系統のほぼすべてがMCG7に属していることが明らかになった。系統発生的関係について、ゲノム解析により、血清型31分離株は、中国、ベトナム、タイのブタの健康な株と主要なクラスターを形成していることが明らかになった。ヒト由来の血清型31 ST221株は、タイから分離された <i>S. suis</i> 血清型5及び24株と密接に関連していた。多剤耐性(MDR)について、すべての血清型31株はMDRを示し、アジスロマイシンとテトラサイクリンに対して全株が耐性を持っていた。血清型31株のうち10株がペニシリンに耐性を示し、8株がこの薬剤に対して中程度の耐性を示した。合計16種類の抗菌薬耐性遺伝子も検出され、最も一般的なものは <i>erm</i> (B)(100%)と <i>tet</i> (O)(66.67%)であった。また、7株が抗菌薬耐性遺伝子を持つ移動性遺伝因子(ICEs)をもっており、ICEsが抗菌薬耐性遺伝子の伝播に重要である可能性が示唆された。病原性関連遺伝子については、強い病原性を持つ血清型2と比較すると、約半数のみに存在していた。本研究は、多剤耐性 <i>S. suis</i> 血清型31のゲノム多様性に関する理解を深め、公衆衛生上の認識向上に貴重な情報を提供するものである。
27	回虫症	PLoS Negl Trop Dis. 19(2025)e0012271	本研究は、ブラジル南部パラナ州の先住民の村において、ヒトとブタのアスカリス属線虫の混合感染及び交雑感染の実態を調査したものである。ヒトとブタの糞便サンプルと村の土壌サンプルの寄生虫学的及び分子生物学的解析を行ったところ、ヒト検体の8.4%(7/83)、ブタ検体の44.4%(8/18)、土壌検体の8.9%(6/68)にアスカリス属の卵が観察された。また、ヒト及びブタのアスカリス・ルムブリコイデス(<i>Ascaris lumbricoides</i>)とアスカリス・スウム(<i>Ascaris suum</i>)の混合感染及び/又は雑種が検出された。ヒトとブタの糞便で汚染された土壌には、2種のアスカリスの卵と雑種も含まれており、両宿主のアスカリス感染源となっていた。本研究の結果は、ヒトとブタの間でアスカリスが伝播し、交雑している可能性を示唆しており、ヒトとブタの双方の糞便の適切な処理による対策が必要であるというOne Healthアプローチの重要性が強調された。
28	旋毛虫症	ProMED-mail 20241230.8721007	2024年12月18日、Ioan Bogolin衛生・獣医・食品安全局(DSVSA)局長が、県立大学の会議で発表したデータによると、Bistrița-Năsăud県では、最近5件の旋毛虫症が確認され、うち3件はクマ、1件はイノシシ、1件は飼育されているブタであった。クリスマスを控えていることもあり、直近ではOrosfaiaの家庭で屠殺された飼育されているブタの事例があり、この2カ月で採取された8検体のうち3検体でクマ旋毛虫症の症例が確認された。Bistrița-Năsăud県のDSVSAの局長は、旋毛虫症と診断された飼育されているブタの所有者は、おそらく今週末までに補償されるだろうと述べた。2024年12月16日以来、我々は飼育されているブタの症例を確認し、ここ数週間でイノシシの症例、クマの症例を3例確認し、補償金が支払われている。家畜の事例が確認されるや否や、県は評価委員会を設置する決定を下した。DSVSAの責任者は、家庭で屠殺されたブタの旋毛虫検査の重要性を強調した。ルーマニアの野生動物では、2種類の旋毛虫属菌が確認されている。ヨーロッパミンクは <i>Trichinella spiralis</i> に感染しており、オオカミ、ヨーロッパヤマネコ、ユーラシアオオヤマネコ、ゴールデンジャッカル、ストーンテン、ヨーロッパアナグマは通常 <i>Trichinella britovi</i> に感染している。両種ともキツネ、クマ、イノシシ、アーミン(オコジョ)で確認されている。

ID	感染症(PT)	出典	概要
29	旋毛虫症	ProMED-mail 20250120.8721487	<p>保健省は人獣共通感染症局を通じて、2025年1月17日、Ischilin県で新たに14人の旋毛虫症患者が発生したことを報告した。症例総数のうち、9人はChuna出身者、5人はHuascha出身者で、Cruz del EjeのAurelio Crespo病院とDean FunesのRomagosa病院で治療を受けており、外来での経過は良好である。疫学調査によると、Chuna出身者の症例は、潜伏期間中の豚肉及びその派生物の摂取に関連していることがわかった。Huaschaの患者については、同じ家族グループに属し、Chuna産の食品を摂取した履歴がある。旋毛虫症は、寄生虫 <i>Trichinella spiralis</i> に汚染されたブタの生肉や加熱不足の肉製品を食べることによって感染する病気である。臨床症状は非常に多様であり、感染に気づかない場合もあれば、発熱、強い筋肉痛、頭痛、目の周りの痛みや腫れで始まる症状もある。下痢や嘔吐等の消化器症状が現れることもある。旋毛虫は、ブタを含む多くの温血動物及び雑食動物に寄生する線虫(回虫)である。温血動物である肉食動物、雑食動物、猛禽類には、数種の <i>Trichinella</i> が寄生している。北アメリカでは、5種又は5種類のトリシネラ属菌が知られている。<i>T. spiralis</i> は、家畜のブタに最もよく寄生する。T-5は米国東部のクマやその他の野生動物に、T-6は米国北西部のクマやその他の野生動物に、<i>Trichinella nativa</i> はアラスカに生息している。<i>T. nativa</i> と <i>Trichinella</i> T-6はともに凍結に強い。<i>Trichinella pseudospiralis</i> は、鳥類からの報告は少ないが、ブタにも感染する。ウマのような草食動物も感染しているが、これはおそらくウマの飼料用に粉碎されたオート麦の混合物にネズミのような感染した哺乳動物が落ちたことが関係していると思われる。</p>
30	日本脳炎B型	ProMED-mail 20250219.8722258	<p>日本脳炎ウイルス(JEV)が、Queensland州南部の2つのブタ飼育所で検出された。New South Wales州とVictoria州でも最近検出されていた。2022年7月以降、Queensland州で動物からJEVが検出されたのは今回が初めてである。JEVはオーストラリア本土で定着していると考えられている為、今回の検出は予想外ではない。Biosecurity Queensland(Queensland州防疫局)は、すべてのブタ飼育者とウマの所有者に対し、JEVの蔓延を防ぐ為の予防措置を講じ、感受性の強い動物に病気の兆候がないか監視し、疑わしい症例があれば地元の獣医師に報告するよう強く呼びかけている。稀に、JEVはヒトに感染することがある。感染した力に接触する機会を減らすことが、自分自身と家畜がJEVに感染しない為に必要である。小規模な群れやペットを飼っている場合も含め、ブタを飼育している人は、力を駆除するための手段を講じるとともに、効果的な防疫対策を継続する必要がある。防疫計画に力の駆除を含めることで、家畜をJEVから守ることができる。ブタに最もよく見られる臨床症状は、流産、ミイラ化又は奇形の胎児、死産又は虚弱な子ブタである。ブタの所有者は、この病気の兆候を警戒し、原因不明の流産や死産を調査するよう求められている。家畜、野生を問わずブタの近くで働いたり生活したりするヒトは、JEVの予防接種を受けるよう呼びかけられている。Queensland州では、2025年に入ってからJEVの伝播が活発である。Queensland州Townsville公衆衛生局は、2025年1月17日、1人がJEV陽性であったと報告した。現在、2つのブタ飼育場で日本脳炎(JE)が発見されている。JEの症例は新しいものではない。Queensland州では、過去2年間にJEの症例があったので、ブタ飼育場で2025年に診断された新しい症例は、驚くべきことではない。ブタの所有者は、上記の対策アドバイスに従う必要がある。ブタ飼育場が感染した地域に住んでいるヒトや働いているヒトは、JEワクチンの接種を検討すべきである。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
31	狂犬病	ProMED-mail 20241005.8719171	サウスカロライナ州公衆衛生局 (DPH) は、サルーダ郡で発見された子ウシが狂犬病陽性であることを確認した。この子ウシに接触した6人は医療機関を受診するよう指示されている。DPHは、2024年9月25日に発表したところによると、最近ミッドランズで狂犬病に感染した子ウシに6人が接触したとのことである。サルーダ郡のプロスペリティ地域で発見された病気のウシは、2024年9月19日にDPHの研究所に送られ、翌日の9月20日に狂犬病と確認された。保健当局によると、子ウシに接触した人々は医療機関を受診するよう指示されたが、彼らの状態に関する詳細な情報は提供されていない。狂犬病は野生動物、特に米国ではコウモリ、アライグマ、スカンク、キツネに感染するウイルスである。ヒトやペットが噛まれたり引っかかれたりすると感染し、発熱、興奮、死亡を引き起こすことがある。治療されない場合、狂犬病は発熱、興奮、そして死亡を引き起こす可能性がある。CDCは述べている。「野生動物、野良動物、又は飼い慣らされた動物に接触した場合は、医療機関を受診することが非常に重要です」と、DPHの狂犬病プログラムチームリーダーであるテリ・マコリスター氏は以前述べている。「狂犬病ウイルスは感染した動物の唾液に含まれており、噛まれたり、引っかかれたり、皮膚が破れたり、目、鼻、口の粘膜を通じて感染する可能性があります。」DPHは、自身、知人、又はペットが狂犬病に感染した動物、又は狂犬病の可能性のある動物に接触したと思われる場合、通常の営業時間(午前8時30分～午後5時、月曜日～金曜日)又は営業時間外や休日に、エイケン公衆衛生局に連絡するように指示している。「すべての動物の噛み傷、引っかき傷、及び狂犬病の可能性のある動物への接触をDPHに報告してください」と当局は述べている。さらに、狂犬病に感染した動物に接触したと思われる場合は、直ちに影響を受けた部分を大量の石鹸と水で洗うように指示している。家畜は狂犬病にかかりやすく、ウシとウマが最も頻繁に報告される感染家畜種であると発表されている。「ペットや家畜の狂犬病予防接種を最新の状態に保つことは、動物を飼う責任の一部です。これは、あなた自身、家族、ペット、そして家畜をこの致命的な病気から守るための最も簡単で効果的な方法の一つです」とマコリスター氏は発表で述べている。当局によると、子ウシに加えて、オコニー郡で発見されたスカンクも2024年9月20日に狂犬病陽性と判定された。スカンクに接触したヒトはいなかったが、1匹のイヌが接触し、サウスカロライナ州狂犬病管理法に基づき隔離された。DPHによると、2002年以降、サウスカロライナ州では年間平均約148件の陽性例が報告されている。2024年には州全体で62件の狂犬病動物の症例が報告されており、2023年の78件と比較されている。
32	狂犬病	ProMED-mail 20241017.8719431	ノースカロライナ州ガストン郡で、狂犬病陽性の子ウシが発見された。2024年10月9日、ダラスの農場で病気の子ウシが地元の獣医病院で治療されているとの通報を受け、ガストン郡警察の動物ケア・執行部が調査を行った。子ウシはノースカロライナ州公衆衛生研究所で検査され、狂犬病陽性と確認された。2024年10月9日の朝、ガストン郡警察の動物ケア・執行部は、ダラスのナローゲージロード400番地の農場で狂犬病の兆候を示す病気の子ウシを治療している地元の獣医病院からの通報を受けた、とプレスリリースで述べている。専門家が事件を調査するために対応し、子ウシを押収した。その後、ラリーにあるノースカロライナ州公衆衛生研究所に送られ、狂犬病の検査が行われた。検査結果は2024年10月10日に返され、子ウシが狂犬病陽性であることが確認された、と発表されている。動物ケア・執行部はナローゲージロード周辺の地域で調査を完了し、コミュニティに狂犬病陽性の結果を通知し、地域内の家族の動物の狂犬病予防接種を確認した。担当者は農場の他の動物に関する問題に対処するため、子ウシの所有者と協力している。ガストン郡警察動物ケア・執行部は、すべてのペットの健康と安全、並びにその飼い主とコミュニティの健康と安全のために、有効な狂犬病予防接種の重要性を強調している。
33	狂犬病	ProMED-mail 20250323.8723089	Delhi首都圏のGreater Noidaに住む女性が牛乳を介した感染を患い狂犬病で死亡した。報告によると該当するウシは野良のイヌに噛まれた後に狂犬病になっていた。近隣地域の数人が狂犬病の予防接種を求めていたがこの女性は予防策を講じず、牛乳を喫飲した数日後に症状を発症した。「必死に彼女を救おうと家族は彼女を複数の病院に急行させたが、彼女は何度も追い返された。最終的に地区病院の医師が彼女を家に連れて帰るよう勧め、彼女はその後まもなく死亡した」とNews18は報じている。

ID	感染症(PT)	出典	概要
34	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20250221.8722292	高病原性鳥インフルエンザA(H5N1)ウイルス、クレード2.3.4.4bは2022年以降米国の野鳥、家禽及び野生動物で検出されており、2024年以降は商業用の乳牛でも検出されている。同ウイルスの遺伝子型B3.13のウシからヒトへの感染例は孤発的、散発的にCalifornia州、Colorado州、Michigan州及びTexas州で発生している。
35	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20250227.8722444	2024年4月以降CDCは各州の公衆衛生局と協力し、米国で70例のヒトのH5型鳥インフルエンザを確認している。米国で確認されたヒト感染の大部分(70例中67例)は、感染したか感染が推定される乳牛や家禽と接触していた。2025年2月24日現在CDCは2025年に発病した3例のH5型鳥インフルエンザのヒト症例を確認しており、感染した乳牛と接触した酪農従事者1例(Nevada州)、感染した商業用の家禽に接触した養鶏従事者1例(Ohio州)及び感染した、家の裏庭で飼育していた家禽群の飼い主1例(Wyoming州)である。
36	H1N1インフルエンザ	GOV.UK. https://www.gov.uk/government/publications/emerging-infections-monthly-summaries/infectious-disease-surveillance-and-monitoring-for-animal-and-human-health-summary-september-2024	2024年9月4日、WHOはベトナムで初めてブタインフルエンザA型(H1N1)変異ウイルスのヒト死亡例を報告した。患者は70歳の女性で、基礎疾患があった。この症例は、フニエン省での1カ月の滞在から戻った後、発熱、倦怠感、食欲不振の症状を示した。2024年6月1日に入院し、当初は肺炎と診断され、2024年6月11日に死亡するまで治療のために別の病院に搬送された。2024年6月5日に採取されたサンプルの検査結果では、サブタイプが不明のRT-PCR検査を使用してインフルエンザAウイルスが確認された。2024年8月1日、ゲノム配列決定の結果、ブタインフルエンザA型(H1N1)変異ウイルスが確認された。感染源は不明のままである。症例の接触者には呼吸器疾患は報告されておらず、症例の居住地周辺の家畜の間での発生はなかった。
37	H1N1インフルエンザ	PIG 333. https://www.pig333.com/latest_swine_news/swine-influenza-a-dominant-viral-lineage-in-france-since-2020_21445/	フランスで、ブタに感染するブタインフルエンザウイルスの主な系統は、30年間変わっていなかったが、2020年にH1avN2#E(国際的命名法ではH1N2クレード1C.2.4)という新系統が、わずか数カ月で農場全体に広がった。デンマークで生まれたと思われるこの株は、最初にBrittanyで発生し、その後急速にフランス全土に広がり、30年間変わらなかった従来の株に取って代わった。Anses(フランス食品環境労働衛生安全庁)の科学者たち、特にPloufragan-Plouzane-Niortにあるブタインフルエンザ国立基準研究所の研究者たちは、主にResavip監視ネットワークを通じて2019年1月から2022年12月の間に収集されたサンプルについて詳細な研究を行った。その結果、この系統は遺伝的にも抗原的にも以前の系統とは異なっており、過去の感染やワクチン接種によるもので、ブタの既存の免疫を回避することが可能であることが立証された。H1avN2#Eの出現は、ブタインフルエンザの発生が急増した時期と重なり、以前は年間平均400件であったのに対し、2020年には661件が報告された。この株は、重度の呼吸器障害、高体温症、流産等、より重篤な臨床症状を引き起こしている。ブタの健康への影響に加え、この株は、人獣共通感染症の重大なリスクをもたらしている。この株は、シチメンチョウの感染症にも関与しており、2021年には重篤なヒト感染症例も引き起こしている。ブタ、ヒト、トリの間でウイルスが再集合する可能性があることから、防疫対策を強化することが不可欠であり、特に新しい家畜を導入する際の検査を強化し、規制上の義務がない場合でもウイルス学的監視を維持することが重要である。

ID	感染症(PT)	出典	概要
38	H1N1インフルエンザ	ProMED-mail 20250207.8721934	<p>Iowa州保健福祉局から、インフルエンザA(H1N2)変異型(A(H1N2)v)ウイルスによるヒト感染が報告された。患者は18歳以上で、2025年1月18日終了週に医療機関を受診し、入院し、病気から回復した。州の公衆衛生当局による調査では、この患者とブタとの直接的又は間接的な接触は確認されなかった。患者の身近な接触者にも発病者は確認されなかった。この症例に関連したヒトからヒトへの感染は確認されていない。これは、米国で2024~2025年シーズンに報告された最初の変異型インフルエンザウイルスによるヒト感染である。通常、ブタで循環する(ヒトでは循環しない)インフルエンザウイルスが、ヒトから検出された場合、それは「変異型」インフルエンザウイルスと呼ばれる。変異型インフルエンザウイルスによるヒトへの感染のほとんどは、ブタに接触した後に起こるが、ヒトからヒトへの感染も起こりえる。ほとんどの場合、変異型インフルエンザウイルスは、ヒトからヒトへ容易かつ持続的に広がる能力を示していないことに注意することが重要である。ブタのインフルエンザ、ヒトにおける変異型インフルエンザウイルス感染、及びブタと安全に接するためのガイダンスに関するその他の情報は、 http://www.cdc.gov/flu/swineflu/index.htmで確認できる。1959~2021年の間、変種ウイルス症例の疫学は、期間、地理的地域、サブタイプ(亜型)によって異なっていた。ヒト間での異なる変異型ウイルスの伝播性は、依然として限定的である。しかし、ウイルスの絶え間ない進化と変異型ウイルス症例の疫学が急速に進展していることを考えると、ヒト変異型ウイルス感染症の監視システムを改善することが世界的に必要である。</p>
39	Q熱	Transboundary and Emerging Diseases. 2025(2025)2890693	<p>本研究は、南アジアにおけるヒト・動物・環境間のコクシエラ症(Q熱)の有病率とリスク要因に関するシステムティックレビュー及びメタアナリシスである。PRISMAガイドラインに沿ってオンラインデータベースにて文献検索を行い、合計112件の関連論文(1954~2023年発表)を特定した。ヒトでは、推定プール血清有病率(EPSP)は9.2%、推定プール保因者有病率(EPCPI)は6.2%であった。反芻動物の群れレベルのEPSPとEPCPIはそれぞれ77.3%と74.6%、個体レベルではそれぞれ11.9%と5.3%であった。血清有病率は、国、マダニの蔓延、繁殖障害、年齢、反芻動物の体調に大きく影響された。反芻動物以外にも、イヌ(16.8%)、ウマ(6.0%)、ブタ(3.9%)、げっ歯類(14.8%)などの哺乳類も血清陽性であった。鳥類では14.5%、爬虫類では29.2%がEPSP陽性であった。細菌DNAはマダニと土壌サンプルから検出され、EPCPIはそれぞれ1.0%と3.3%であった。ヒト、家畜、家禽、ペット、野生動物の感染を予防するために、ワンヘルスアプローチを優先することが推奨される。</p>